

昭和36年1月16日第3種郵便物認可 昭和46年1月1日第163号 (毎月1回1日発行1部20円)

NO 163

# 全 日 仏

1 / 46



(初日に輝やく聖地高野山)

財団法人 全日本仏教会

昭和46年1月1日

# 昭和四十六年を迎えて

全日本仏教会会長

大 谷 光 照



一昨年暮れに会長をお引受けしてから、既に一年を経過しましたが、顧みて一向お役に立っていないことを、何よりも先ず恐縮しています。こうした反省の中で、今年の全日本仏教会の活動を思う時、その使命の重大さを強く感ずるものであります。

平和の問題にしても、世界各国の政府も民間人も、いろいろの考え、いろいろの立場からその実現に努力を払っていますが、近い将来にまちがいがなく、世界の平和が実現されるという見通しはまだ立っていません。しかし戦争は現実には続げられており、軍人はもとより、多くの一般民衆が、直接、間接その犠牲となりつつあることに思いを致す時、「以和為貴」の聖徳太子の御精神を仰ぐわれわれ日本仏教徒は、信仰を根底とした平和運動を進め、世界の各宗教の教徒とも手を取り合って、世界平和の実現に寄与すべきでありま

す。この意味において、全日仏が関係した昨年八月の広島での平和促進宗教者大会と十月の京都での世界宗教者平和会議とは、この方向を示したものであり、今年もより一層効果のある活動を期待します。

また、全人類の生存を脅かすようになった公害、交通の問題も、宗教者の自覚と実践に、深いかかわりをもつものであり、今まで政治や経済の課題と置いていたこれらのことも、その根底に人間精神のあり方が問われていることを痛感します。したがって、これらの問題に対しても、宗教者の立場からその解決に積極的

に協力しなければなりません。こう考えてくると、全日仏のなすべき仕事は数多くあり、その超宗派的性格は、前述のような問題に対処するにふさわしいものでありますから、各宗各派の先頭に立って力強い歩みを示すべきでありましょう。また各宗各派も、このような全日仏の使命と性格を理解され、積極的な活動のできるよう、物心両面にわたって応援していただきたいものであります。複雑多岐な現代社会にあつては、個人の力よりも組織の力が大きくものをいうわけでありますから、仏教全体を代表する全日仏の役割は重く、役員各位も事務局の諸氏も、仏教徒の先頭に立つ気概をもってその使命の達成に協力されることを望んでやみません。

昭和四十六年の新春にあたり、率直に所感を述べ、年頭の御挨拶といたします。

## 謹賀新年

財団法人

全日本仏教会

会 長

大谷光昭

副 会 長

出口常順

理 事 長

稲田稔

常務理事

田中隆恵

積 秀 伝

江 西 堂

築 山 定 誉

宮 前 鳳 洲

山 田 義 道

太 田 淳 照

小 林 大 巖

三 森 言 融

工 藤 義 修

片 山 日 幹

伊 藤 哲 雄

高 橋 隆 天

栗 本 俊 道

村 瀬 良 彦

田 中 亮 三

松 本 徳 明

山 本 亮 三

千 葉 照 源

大 石 好 文

清 水 谷 孝 尚

岡 野 正 道

味 岡 良 戒

入 江 宥 憲

高 辻 忠 雄

保 田 純 精

神 村 抽 底

山 中 浩 文

芳 賀 達 宗

後 藤 憲 巖

倉 持 秀 峰

熊 野 通 巖

井 上 憲 司

中 野 龍 夫

井 野 敬 重

中 野 文 博

蒲 池 敬 繁

中 山 理 英

吉 田 秀 映

深 田 英 雄

久 保 埜 太 清

監 事

春 山 暉 子

# 聖徳太子の

## 御聖忌を迎えて

全日本仏教会副会長

出口常順

今年、聖徳太子の千三百年の御聖忌に当る千載一遇の年である。

日本人として、殊に日本仏教徒として、太子の偉大な御芳躰を偲び、心を新たにしてその御偉徳を顕揚することに努めなければならぬと思う。

去る大正十年、聖徳太子千三百年の御聖忌に際しては、四天王寺、法隆寺、叡福寺を中軸として、太子奉讃の声は洋々として全国に高まった。多彩な御忌慶讃の大法会、記念奉讃の諸事業が方々に起った。不朽の名著、諸種の編纂の諸事業、太子研究の学徒が次ぎ次ぎと輩出されて、太子にかかる雲霧は晴れて、太子の偉容が富士の霊峰の如くに仰がれた。

五十年後の今、往事を顧み、現在を思う時一入寂寥の感なきを得ない。

仏徒は和国の教主と仰ぐ、太子の御恩徳の前に只手を拱いて浮薄な経済繁栄の昭和元祿の中に空しくさまよってはいはならない。

太子によって仏教は興り、各宗の祖師はその御恩徳を齊しく奉讃している。今その未徒たるわれわれは、何をなすべきかを考えなければならぬ。

世界は今や一つに狭められた。地球上に棲む三十余億の人類のすべては、平和と幸福を望みつつしかも戦争と破壊に戦っている。

五千年の歴史の中核であった西洋文明は二十世紀の今宇宙時代にまで高揚した。その中核であった科学的知識の究極は原子さえも破壊して核をも人の手に握らせた。この科学の頂点に立った人類は、己れの作った

鬼子によって、自らを破壊するの崖頭に立たされている。

今こそ聖徳太子が憲法の首に教示された「和を以て貴しとなす」の大精神を全人類が体得しなければならぬ時である。その和の大精神の実現は篤く三宝を敬ってわれわれの狂れる心を正さなければ、その実現は達し得られない。

太子千三百年の御聖忌に当ってわれわれは数々の太子の御徳の顕揚につとめるとともに、とくに「和の精神」を全世界に向けて宣揚することが最も大切な責務である。

## 全仏の陣頭に

全日本仏教会理事長

稲田稔界



新春を迎え、全仏教徒各位が仏陀の御名のもと、愈々すこやかに社会浄化にご精進下さる姿はただ感謝にたえないところであります。

願ひまするに旧き年は七十年代という新世代の幕明けであり、万国博に象徴された物質文明の進歩の急速さは人間自身が驚異と戸惑いさえ覚える状態でありました。高度経済成長のひずみは公害となって現われ、人間の生命の危機を招く結果となっております。そこに精神復興による調和の言葉が社会にさわされはじめました。しかし現代人の意識する調和の観念は必ずしも宗教の必要性を指しているとは受けとり難いものがあります。

### 事務総局

事務総長	伊藤哲雄
総務局長	熊谷幸雄
組織局長	桜井大乗
国際局長	新間信雄
文化局長	白幡憲佑
国際部長	柳了堅
組織部長	伊東純
文化部長	阿部照瑞
総務部長	小澤一
他	職員

### 関西事務局

事務総長	鶴岡隆玄
総務部長	二本松聖順
組織部長	岸本賢祐
国際部長	春田義正
教化部長	奥博良
他	職員

宗教不在の姿は、とりもなをさず現代人が真の宗教を渴望しているともいえるのではないでしょうか。

公害問題に限らず宗教人の奮起は問われ続けられています。仏教界にあっても全一仏教運動の提唱の歴史は既に久しいものがあります。その強力な実現は容易にみることができません。昨年来、全仏の体質改善が叫ばれてきました。これは単なる人事や機構問題ではなく、全仏自体が仏教の姿を具体的に現代社会に解決させる作業をとり戻すことでもあります。

不敏ではありますが私は、全一仏教運動の尖兵として粉骨の覚悟を新らたに致してをります。各位の御支援を切願いたして新年の御挨拶といたします。

# 七一年への教界展望と願望

眞 溪 義 貫  
(全仏文化専門委員長)

(1)

新しい年を迎えるたびに、われわれはこの一年の展望を試みたり願望をのべたりするのが例である。ところが一年の幕を閉じようとするとき、大抵の場合、的はずれだったり絶望感に打ちひしがれることが多い。夢は容易に実現しないものである。それにもかかわらずここにまた迎えた七一年の教界展望と願望を敢えて記そうとする。人間は、その発生以来絶えず未来を予測し、そして未来について考へてきた。人類の始祖といわれるホモ・サピエンスの脳は、抽象機能ばかりでなく、いろいろな相の展開現象の中から、その因果関係を見出し、あるいは現出していない架空の存在をも論理的に想像するメカニズムを固有していると考えられている。

このメカニズムについての研究は人間の本質や、人間発生えの基本的な問題として極めて興味深い学問であろうが、ここではそのようなことには触れるのが目的ではない。ただ人間発生の当初においては、未来予見の能力は他の生物との闘争において優位に立つたためのものであったが、人間が生きていることの安定を得た

後では実用性を超えて飽くことなく事物の根源と究極に向って問いかけ働きかけ続けるといふ指向性が人間の特質とさえなっているように思えるのである。そしてこの人間の未来予見能力や推理能力としての意識は、人間の持つ生物的情報伝達の機能の外に、いろいろなメデヤを通して蒐積されて文化、文明という情報体系を作り上げた。しかしながら、その意識もやはり越えがたい壁にぶつかるのである。それは人間は何故に死ぬのか？またその死を避けることができないのか？そして死の向う側に何があるのか、生の究極の目的は何かといった問いかけがそれである。この問いかけに対し、時代や環境を背景として答へてきたのが宗教であろう。それぞれ工夫された答へによって異った宗教が生まれ、いろいろな終末観を提示してきた。しかし、近代になって科学の急速な進歩、技術の驚くべき発達によって、諸宗教の「解答」は音をたてて、破壊されつつある。さまざまなベールは剥ぎとられ、人間はむき出しの広大な宇宙のなかで方向を失ってしまった。古い時代では情報の伝達は大変緩慢であったから、これを学習して新しいも

のを創造するには長い時間を必要としたが、現代のようなスピードで、過大な情報時代では学習も便利であり、短時間で新しいものが創造される。

昨日の定説は今日の原理ではないし、時間と空間は益々狭く短くなってゆくに從つても早やわれわれは一年という長い時間の展望は不可能に近い。にもかかわらず未来に対する根源的な問いかけは、個人にとつても社会にとつても人類にとつても依然として否、なお一層強く深刻なものとなっている。過去の宗教が提示した宗教の回答がすべて破壊されたと言つて、そのままよいのかどうか、破壊されたのではないという確信があるなら、この現代に見事な再解答を出さねばならない。もしそうでないなら、所詮仏教も滅びゆく運命を辿らざるを得ない。従つて七一年の教界展望と願望は、この解答のためにどんなプログラムを持ち、どのようなカリキュラムを展開すべきかということに他ならない。

(2)

の微妙なズレがそうさせたのであろうが、ともかくあっさり自然延長となつたもの、反面、沖繩返還が決まり、さらに米軍基地の大巾な縮小が次々と打出され、結果は実質的に反安保の体制がなし崩しに実現されてきた。そしてこのことは、逆に自主防衛の強化へと押しやっている。このことは五兆二千億円という第四次防衛の計画を見ても明かである。中共その他が日本の軍国主義化を指適するのもこのような傾向を指適しているのかも知れない。

わが国の憲法下において軍国主義化はあり得ないと抗弁しても、三島事件のようなものが氷山の一角だと見る向もある。靖国神社問題もその一面として捉へる人もあるが、ともかく自主防衛を正当化する理論と思想統一の傾向は好むと好まざるにかかわらず旺盛とならざるを得ないであろう。この意味で昨年の宗教界でもポツポツ宗教による世界平和の問題が採り上げられ、特に仏教の相依相助の精神を枢軸とするアジアの緊張緩和、あるいは開発が提唱されたのは注目し得る。モンゴルや朝鮮で、世界的な会議形式で仏教会議が開催されたり、セイロンで今年五月開催の世界仏教徒会議の予備会議が持たれたりして仏教的な立場からする国際的な諸問題に対処しようとする意欲がやや盛上つてきた。また国内的には世界連邦運動に対する仏教徒の関心が深まり、あるいはアジア開発に取り組むなど少しづつではあるが、疎外された

人間を回復するために、戦争、公害などを含むあらゆる疎外要因の除去に立ち上るとうとする氣勢を示し出している。問題はこのような氣勢をどのように組織化し、具体的な実践として展開するかにある。仏教が現代および未来社会の形成原理となるための理念もいまだ確立されていないし、何等のプログラムも制成されてはいない。カソリックは欧州の運命共同体を確立するために、未だ見たことのない百八十度の転換を行って、ともかく近代化されたカトリックシズムを根幹とする欧州共同市場体制を確立し、その勢をかって世界の「キリスト教々々会一致運動を力強く展開している。もちろん虚々実々といった感はあるにしても、今や全キリスト教の共闘が成功を取めている。さらにアジア開発のキリスト教会議にしても、他宗教の参加を要請したり、世界宗教平和会議に主要勢力を占めるほど多数に参加して他宗教との協力を打出しているのに比して、仏教側は国内的協力でさえ未だしの感が深い現状である。

(3)

友松円諦氏が何かの雑誌で日本は経済大国になったが、反面宗教小国になったと言っているのは同感である。米国ケンタッキー州のルイーズビル大学心理学教授、ポールキヤメロン博士が全米五都市の住民三四一六人を対象に意識調査を行った結果、中年の大人は、三十五分に一回性について、十五分に一回宗教について考えるが、青年(一八一―二五歳)は十

分間に一回性について、二十五分間に一回宗教について考えるという統計が出たと朝日(四五、一一、二日海外トピック)で報じている。果して日本人を対象に同様の調査を行ったとしたらどうであろうか。少なくとも青年はほとんど宗教については考えないであろうし、大人だつて先づ性と金が意識の最高率を占めるのではないかと想像される。文部省の意識調査では、寺院住職の社会的地位は三十八番目で女性側の看護婦と同列であるという。

またある雑誌の調査ではホテルのマネージャーに次ぐ十九番である。いづれにしても信仰についての国民の意識は極めて低く、聖職者の社会的地位も決して高くはない。このような一般社会から疎外されている現在の仏教界に、新しい年を迎えたからといって大きな期待をかけた展望は一寸困難に思える。ただ「全日仏」が制度調査委員会を設けて仏教興隆の具体的、かつ、積極的な推進を図るための機構確立を目指して発足した。もちろん、どのような立派な青写真ができて、これを勇気をもって実践する意欲がなければ設計図はそのままに埋れ、何らの創造も建設も生まれてはこない。しかしこの機会に思い切った仏教界刷新の白書を作成して教界の世論を昂め、一歩でも体質改善に役立たしめて欲しいものである。宗教者平和会議の「開発部会」(K・G・サイダイイン議長・印度・回教)の報告書が無修正で可決されたが、

そのなかで「人々が富を崇拝し、その使用を誤っているのに全く無関心である。とくに悔いなくてはならぬのは、キリスト教世界である。例外を除いて世界で富の集積されている部分はキリスト教世界と呼ばれる部分である」と述べている。このような批判を大多数がキリスト教の参加者であった会議が可決したことは注目しに値する。

これに反して仏教国といわれる多くの国々で悲惨な戦争が展開され、かつ仏教国の多くが貧困である事実の検討批判が行われなかったことは遺憾である。トインビーが、つねに世界の人々から注目されるのは、彼が西洋人でありながら、西洋人の偏見を厳しく批判し、「西欧文明が近々数世紀を支配したからといって、それは永遠のものではない。やがて世界史の中心は、東にアジアに、非西欧にかかってくるだろう」と西洋人の偏見の超越を叫んでいることにある。たしかに仏教の持つ思想は未来社会の形成原理となり得る可能性を含んでいる。要はトインビーと同じように厳しい自己批判から出発し、勇気を持って体質を改善しながら世界の仏教へのカリキュラムを実践することにある。今年の世界仏教徒の会議も開かれる。日本仏教は総決起すべき年である。そして一般社会大衆から疎外された仏教界を大衆のなかへ押し進める年であればならぬことを強く願望してやまない。

## 頌春

曹洞宗

大本山 永平寺

貫首 佐藤泰舜

監院 宮崎文輝

外 役寮 一同

# みんなで話しあう 新春放談



岩本勝俊 禅師  
(曹洞宗管長)

きき手 白幡憲佑  
(全仏文化局長)

——禅師さまは今年はお幾つになられますか。

岩本 私は満で七十六歳です。

——禅師さまとしては今年、こんな年にしてみたいといったようなご希望というか抱負なんかを……

岩本 いやー抱負といえるかどうか判らんが、私はこの処(大本山鶴見総持寺)に出た時からなんだが、ここは先代はご承知の孤峰禅師で、非常な学者肌で沢山の著書も残した方ですが、その前の渡辺禅師という方は座禅一本でやった方で、九十五歳まで指導され、孤峰禅師も八十九歳でしたが、私はこの処の寺柄からいって座禅一本で通し、とくに今年はずべての階層の多くの人々と接し、お互いが腹からうちとけた話し合いをもつ

て、平和な社会づくりをしたい。こんな希望を先ず第一にもっているんですよ。

——今年はその年になりますか、通俗的ですが猪突猛進なんていいですか。

岩本 禅と日常生活ということからは禅家では日々是好日、即ちその日、その日を最も尊く生きるといったことを一年の計としてたてます。お互いが自覚をずる。私の方でいう禅心をもつことです。これは社会全般に浸透させるためには、まず各宗がお互いに理解し合って手を結んでいくという自覚を宗教者が持たなければならぬ。宗教者の自覚が足りないところに本當の仏教運動も起きてこない。

## 宗教心とは

——宗教心についてこちらでは学校を経営したりして教育に熱意をいれていますが、近頃の学生や若い人々に対しては如何に考えられますか。

岩本 私のところでは開山禅師が大変に親孝行な方であつて、その意味からも昔から女子教育専門にやつてきたんですが、最近女子学生が執行部といったものをつくり、例えば宗教教育することに反対を唱えたりして学校当局とぶつかり合ったこともあります。もっともこれは大学の方であつて、中学、高校の方では宗教々育として座禅も読経もやりますが、大学ではやっていない。やっていない連中が宗教々育の反対をとなえて座り込みをやるというから、私は、どっちみち座るなら禅堂で座禅でもやってみる(笑)といったのですが、宗教々育をやらなければ、なにも本山で学校などやる必要がない。これは文部省も考えなければいけない、若い人々の自己主張ばかりでは人間形成はできません。お釈迦さまは一切衆生必有仏性といわれているが、私は教育のあり方に信念をもてば、必ず宗教をいまの若い人々にも持たせることができると思っています。

——先日、ある高校の理事長兼校長さんと話をする機会があったのですが、いまの若い人々を含めて日本人全体が宗教について真剣に考える時期にきているということなんです。もっともこの人は坊さんではありませんが、その人のいうことは、現在の日本人の宗教心欠如については坊さんも教育者、それに政治家も反省しなければならぬ、だが明治以来の日本人。

岩本 とくに戦後の日本人ね。

——そおです、その考え方が非常に科学万能という傾向に陥ち入って、その次元と同じところで宗教も考へている。そこに間違いがあるんじゃないかといっていました。

## 公害問題も仏教界から発言を

岩本 同感ですね。科学をより深く求めることは結構なことですが、人間を超えたるもの、真理、心といったものに対する求め方、そこに問題がありますね。

——昨年は新聞、テレビすべてが公害問題にあけられて今年もこの問題が社会的に一番大きな焦点になると思われますが。

岩本 そおです。この問題については仏教界も積極的に発言しなければなりませんね。全仏あたりが指導体制を持って、真剣に話合うことです。利害にとられず、人間の生命の問題として、政治家も宗教者の意見をきき、宗教者も宗教の立場から、この問題に取り組んでいく、そんなところに日本人の宗教心の復興ができてくるんじゃないですか、もっとも政治家も反省してもらいたい。例えば全日仏の大会などには代理を出席させてお茶をにごすが、票になりそうな会合には本人が出席され、こんな宗教軽視では公害問題の根本的な解決はできない。

## 全仏のありかた(縄張り根性は障害)

——全仏の問題が出ましたが、全仏自体の体質改善が昨年から強く叫ばれてきましたが、対外的にいまの問

題ひとつをとりあげても、仏教界としての意見をまとめていくということ、なかなか難かしいですね。

岩本 仏教界の結合といった問題ですが、お話の通り難かしい。私も若い頃から全仏の母体ともなった仏教同志会、仏教連合会の仕事を諸先輩とともにやった経験があるが、まずいえることはお互いにあんまり縄張りを主張しないことですね、仏教における各宗団はそれぞれ日本の国の発展ともあったものです。その時代時代ともに生きてきたものです。平安の仏教、奈良の仏教、それはみんな日本の仏教の発展の姿です。鎌倉の仏教あたりになって東京、関東あたりが新しい仏教の姿を現出しはじめたのですが、各宗ともに、その時代の誇りをもってきています。ここ（総持寺）あたりは国宝といったものはまったくありません、奈良、京都あたりとは歴史の重みはちがいます。しかし、時代の要求に応じた宗教活動、これが各宗をうみだしているのですから、まあ、お互いが助け合っていく、それが日本の仏教をよくすることです。

——縄張り根性を捨てる。よいことですね。全仏は寄り合い世帯だからとよくいわれるのですが、私はちがうと思うのです。仏教という同一世帯なんですよ。岩本 そをなんです。仏教がひとつになっていく。これが時代の要求じゃないですか。しかし、あくまでも各宗の教義、伝統は尊重しなければいけません。お互いが信頼しあって話合っていくこと。そして各宗が全仏に対してよりよい人材をおくりこんでいく。

——そおなると私などは文字通り失格（笑）

岩本 人物本位といいますが、これもなかなか難かしい新興宗教と既成教団の違いがこんなところにあるんじゃないですか、例えば新教団ならば、実際に本当に働く人ならば、どんな重要な地位につけていく。旧教団は年功序列といった手続き。まあ時代要求とと

もに変わらましようが。教団としてもそおなで、やはり問題がでる。仏教運動というひとつに駆け合っていけばガマンもできるのですが、やっぱり根性やあんまり自分のところの縄張り根性は持つべきではありません。



——実際問題として全仏の構成面から人事問題、教団中心か各地仏教会中心かと問題はありますが、仕事の面では日本仏教界の統一組織体としての全仏は必要な存在だと信じます。

岩本 その通りです。例えば仕事の面でも宗団でやれ

ば問題なくいくが、全仏がやると種々と障害がでる。これもおかしい。大きな宗団では、たしかに相当な仕事を自分のところでできますよ、しかし、だから全仏の存在は必要だなんていうことは絶体にあります。それには全仏の指導力の確力が必要です。これには各宗団が本当に自覚して協力していく。これ以外に体質の改善はありえない。お互いに助け合っていく。それをするのが仏教ですよ。

#### 世界連邦宗教者大会

——大変に勇気づけられました。私たちも誠意をもって仕事を積極的に見出していく。全一仏教運動に対して全仏当局も、もっと使命感をもちたいですね。今年の仏教界にとって最初の大きな仕事は、こちらで開催される世界連邦の宗教者大会ですが、全仏としても絶対の協力を自覚しています。

岩本 この大会はご承知の通り、身延山であり、昨年は広島でおこなったんですが、私は身延山大会のときにも藤井法主や関係者の方々より是非、出席しろといわれ協力したのですが、仏教は勿論のことキリスト教、神道など、日本の宗教者がお互いに共通の目的のもとに話合う機会はどうしつくるべきですよ、こんどの大会も総持寺が勿論おこなうのではありません、便宜上、私どもの方で仕事の責任者は出しています。総持寺という禅寺を道場にして日本の宗教者が協力して平和な社会、世界づくりをしていくということです。各教団が伝統を尊重し合い、共通目的に対して誠意ある話し合い、そして実行協力。この大会には是非とも多くの人々に参加していただきたい。禅寺のことですから約二百人の僧侶はいても修行中の者も多く、おもてなしはできませんが、宗教者の良心の結集のために協力して下さい。

（文責編集部）

# ひらけゆく71年 新春に寄せることは

## 大同団結と大菩提心を

三森 言融  
(真宗大谷派宗務総長)



新年おめでと  
うございます。  
新しい年ととも  
にわれわれ仏教  
徒の使命と任務  
は、愈々重大大

であることを痛感させられます。人間の  
手によってつくり出し、導びき出した今  
日の文明は、そのために却って人類を危  
機に追込み、ともすればきたるべき二十  
一世紀は人類滅亡の世紀ではなからうか  
と懸念せらるる現実に対し、われわれ仏  
教徒こそが先づ思いをあらたにし、大同  
団結して大菩提心を身につけ、実践せね  
ばならぬことを今さらながら、全身のひ  
きしまる思いで受けとめねばならぬと存  
じます。

ことに今年はわれわれ日本仏徒にとっ  
て、和国の教主聖徳太子の千三百五十年  
に当たります。全仏教徒は今こそ太子のご  
精神にかへって、再出発をせねばならぬ  
年でありましょう。

わが真宗教団におきましては、そのう  
えきたる昭和四十八年に宗祖親鸞聖人の  
御誕生八百年と立教開宗の七百五十年を  
迎えることでありますが、この勝縁を目  
標に教団の体質を改善し、一致団結して  
現代社会のなかに教団の使命を遂行いた

すことに全力を傾ける覚悟をいたしてお  
ります。

## 年頭所感

千葉 照源



(天台宗宗務総長)

輝かしい昭和  
四十六年の新春  
を迎え、謹しん  
で御祝詞申し上げ  
ると共に、十  
方諸賢の御多幸  
と、祖国日本の繁栄をして世界の平和を  
祈念して止みません。

諸法無我は大聖釈迦牟尼世尊の提言で  
あるが、各教宗派それぞれ宗我にとらわ  
れ易いのが現状である。歴史的発展の過  
程において分派したことであるし、そこ  
にこそ今日の隆盛を現出したともいえる  
ので、また止むを得ぬことでもあろうか  
しかし、自家のみ唯一無二とし、他は  
これを容れないとするあり方は、日本の  
繁栄と平和につながるものでもないし、  
真に大衆を幸せにするものでもない。

全日仏にあっては、夙に全一仏教運動  
を提唱し、非常な努力を払われているの  
で、甚深い敬意を表するものであるが、  
駄足ながら敢て一言申すならば

一、現下教界の事情に鑑み、とくに社  
会の要請に因應するため、各教宗派間の横  
の連絡を一層密にし、つとめて共通の話  
合いの場を持つようリードされたい。

二、会議は、教宗派代表会議も必要で  
あるが、より重要なことは、実務者の会  
合を多く持たれたい。

三、新時代にそう施策の協同研究と資  
料の提供に一層の努力を払われたい。

## さらに前進

江西 寛堂



(妙心寺派宗務総長)

謹奉賀新年  
一九七一年一月  
一日

七十年は何か  
驚天動地の事態  
が起りそうな情  
報を聞かされていましたが、さしたるこ  
ともなく、万国博覧会も無事に而も盛況  
裡に終了致し御同慶に堪えません。

わが仏教会としてとくに銘記すべきこ  
とは昨秋京都国際会館において開催され  
ました世界宗教者平和会議のことであつ  
たと思ひます。私も仏教の代表者の一人  
に加えられてその開会式に出席させてい  
ただいたことはまことに光栄に存じ、得  
難き機会に遭遇できましたことを衷心感  
謝いたしております。

而もあれだけの人々を集め万事行き届  
いた準備は局に当られた方々の並々なら  
ぬ御苦心が窺われまして心から敬意と謝  
意を表したいと思ひます。又総裁西本願  
寺門主陛下の悠揚迫らない御挨拶とその  
弁旨は実に我が意を得たりと失礼ながら

大いに讃辭を呈するものであります。

その他諸外国の方々の所論も夫々人種  
国柄の特徴が出ていてとくに未開発国あ  
るいは動乱の地の代表者の言論は真に迫  
る熱血の雄叫びとも思われ感慨深いもの  
がございました。沢山のお金のかかった  
ことと思われませんが、お金のかかった  
だけの所得は大いであつたものと存じ、こ  
れらをご推進下さつた各位に厚く御礼を  
申し上げる次第です。本年もまた意義深  
き一年であることを只管念願致しおりま  
す。

### 仏教精神の復興

山本 スギ

(全日本仏教婦人連盟理事長)  
参議院議員



年頭に当り、  
しきりに思うこ  
とは、日本国憲  
法はその二十条  
に信教の自由は  
何人に対しても

### 可説便物三種全第3

これを保障するといひ、一方国及びその  
機関は宗教々育その他いかなる宗教的活  
動もしてはならないといつて日本人を無  
信の科学信仰に追いやったことです。  
今、日本の社会のためにいろいろの  
なやみを抱えて苦しんでいます。教育制  
度の改革も考えられています。私はこの  
際好ましき人間像をなど、なまぬるいこ  
とでなくそのものずばりで仏教精神によ

るひとづくりを単刀直入に提唱したらい  
かがかと思うのです。それにつけてもま  
づ仏教を標榜する学校が成果をあげてみ  
せることだと思つたのです。

### 新春偶感

栗本 俊道

(東京都仏教連合会会長)



新年をおよほ  
こび申上ます。  
亥歳のことは  
猪突猛進の年と  
いわれますが、  
考えは深淵にを  
忘れてはなりません。「生活は簡素に、  
考えは深淵に」の金言こそ新春第一歩に  
みづちりとかみしめることを提言しま  
す。

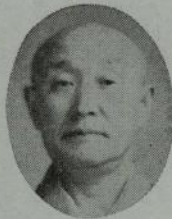
昨秋の新潟大会では家庭と青少年の問  
題が大きくとりあげられた。今日の青少  
年問題は単に青少年自身の問題だけで  
なく、おとなの姿勢、家庭のあり方の問  
題であり、社会の病態の一つであるとも  
いわれる。終戦直後の貧困虚脱社会にお  
ける問題から豊かな都市化社会の出現に  
伴う新しい問題へと移行してきたからで  
ある。物に榮えて昭和元祿の狂った現  
代、恵まれすぎて感謝の心を忘れ、神仏  
を敬い祖先に報恩する気持ちを失なつた  
とき、現世は物で榮えて心で滅びる。い  
ま喧ましい公害問題に心の公害が取り残  
されている。

日本を育て上げてきた日本精神は日本  
仏教の本質、明正和の三宝精神を奉行し  
たものであり、心の公害はこれをむしば  
みつつある。これを取り除いて社会を正  
常化するためには仏教徒の総決起が強く  
要請される次第である。全日本仏教会は  
その組織をあげて危機を柔む社会の病態  
を、根治するために立ち上ろう。治療は  
制度機構でなく、刀圭の人による。亥歳  
の新春、宸題「家」の初春を迎えて偶感  
寸言を味読していただきたいものであ  
る。

### 新春にあたり一言

大石 好文

(岐阜県仏教会々長)



あけましてお  
めでとござい  
ます。  
毎年繰返される  
詞であります  
常に新らしく、

すがすがしく魅力に充ちています。  
それは無事に生かされてきた一年を心か  
ら感謝し、迎える新年に明るい希望を托  
す喜びの声であります。冥土の一里塚と  
は世をすねた言葉でありましょう。改め  
てお互いの健康を祝福しご同慶に堪えま  
せん。お正月はお正月らしく寒いのが宜  
らしい。先年インド、サンチーの三塔に  
あつた舍利仏、目蓮尊者のご遺骨が荘園  
よりかえり、その開眼供養の親善使節団

の一員として渡印した帰途、ボンベイの  
タジマールホテルに泊つた。ちょうどお  
正月だったが暑い国のお正月はわれわれ  
日本人にはピンとこない。クリスマス  
飾りは形の如く綿雪で化粧してあるの  
が、ほほえましい。お正月の行事はどう  
も日本が一番盛んなようである。それだ  
けに子供は子供なりの楽しみがあり、大  
人は大人なりの楽しみがある。寒いとき  
に一年の計をたてるのが一番宜しい。わ  
れわれは恵まれた風土に感謝し本年も生  
き甲斐のある暮しを送りたいものである  
。岐阜県仏教会は昨年(お経を習お  
う)運動を強力に展開し成功を取めた、  
本年もこの運動を推進し青少年健全育成  
の一助にしたい。これこそ一般寺院が平  
易に取りあげれる教化活動である。大人  
が精神復興に関心をもてば、子供らもこ  
れを求めていく。

### 新春と仏教保育

五島 宗宣

(日本宗教保育事業協議会理事長)



賀正 明治時  
代は四十五年で  
幕を閉じたが、  
昭和時代は、そ  
の年歴を越え  
て、ここに四十

六年度へと進出した。日本の歴史の上  
に、素晴らしい栄光の新春で  
ある。

この迎春にあたり新しい事務所で、稲田稔理事長を中心に新年を迎えた全日本仏教会に対し心よりの祝福をささげるものである。

甦える、この新春に思うことは、驚異的な民族のエネルギーは、とくに経済的・外交的に目ざましい興隆前進をつづけた日本が、宗教的精神的には余りにも貧困であること、しかもこれが根源であるはずの宗門の現状、教団の有り方が、全くきびしい社会生活から遊離した存在であることはまことに心外にたえない。

こうしたなかにおいてただ、仏教保育の名による幼稚園、保育園の動きは、何れも、地域社会と密着して一般社会の教育と福祉に重大な役割を果しているというのである。

しかも年間を通じて、どここの園でも、花まつり、成道会、涅槃会、等々の仏教的諸行事を実施して、国および地方公共団体のなし成ない、宗教情操教育を担うとして、仏教保育の実を挙げている。

仏教寺院、本来明るい教理、聖なる環境の下で、明らかな指導がなされるべきだと私は考える。

然るに寺院に対する感じが暗ら過ぎたり、活気のない、人の嫌うお墓を思うのが寺院のおかれている立場ではないだろうか。

そのようなお寺でも、ひとたび幼稚園をはじめ、保育園を開設すると、その寺門に活気がみなぎり、賑やかな明るい活動体の寺院に一変する。したがって、そ

の寺を見る一般の目が変わり、明るい寺に、気高い期待と、大きな感謝がその寺に向けられるようになる。あたりに仏教保育を実施することは、仏教寺院の近代化を約束する立派な聖業である。

### 慈悲の救援

すでに大々的に報道されたとおりさる十一月十三日の夜、東パキスタンを襲った史上空前の台風によって多数の死傷者並びに家屋流失の被害が今までにないレコード破りの悲しい惨状になった。全体としてはこのニュース報道に対し早速現地政府ならびに仏教会へ見舞電報を打った。この電報の全文が現地の新聞紙に掲載され、また次のような町重な感謝の返信がこのほど全仏にとどいた。

東パキスタンを襲った史上始めてのサイクロン禍に対して、十一月十七日付で早速お見舞電報をいただきました有難とうございました。

貴会のご温情に対して心から感謝申し上げます。

一九七〇年十一月二十日  
東パキスタン政府  
官房長官 スラール・イスラム

### パキスタン仏教会からの礼状

この度の東パキスタンをおそった未曾有の台風によって多数の人命と国民の所有財産を失ってしまいました。このときに貴会の見舞電報を受取り、その親切なるお心遣いと、また私たちの同胞がうけた災害とを思いあわせ乍ら、思わず涙で胸がいっぱいになりました。

東パキスタンのチャッタゴン地域には多くの仏教徒がいます。この台風で彼等の家屋は流失し、寺院の建物は完全に破壊されてしまいました。この災害からの一日も早い復興はパキスタン政府の援助と世界各国の皆さまのあたたかいご支援がなければできません。

パキスタン仏教会は孤児院を併設してありますが、その建物は完全に荒廃してしまいました。しかし孤児五十五名の生命に支障なかったことがせめてもの幸いです。

貴会のご親切なるお見舞電報に深く感謝の意を表します。

一九七〇年十一月十九日  
パキスタン仏教会々長  
ピスタンンダ  
全仏当局としては緊急会議を開き、加盟宗派団体ならびに各県仏教会、大本山仏教主義関係学校へ募金協力を依頼した。とくに東パキスタンには天親菩薩(世親)の出世地として現在も多くの仏教徒がおりこれらの人々への救援は日本仏教徒の責務でもあり全国仏教徒の支援を切願している。

### パキスタン大災害 救援金感謝録

(十二月十日現在受付 第一次分)

(敬称略)

一金壹拾万円也 全日本仏教会

務総局一同

一金三万六千四百三十八円也

東京都仏教連合会(第一回分)

一金二十万円也 埼玉県仏教会

一金三十万円也 孝道教団統理岡野

正道

一金五万円也 愛知県仏教会

一金一万円也 香川県仏教会

一金二万七千二百円也 円覚寺日曜

説教会

一金一万六千六百九十二円也 全日

本仏教婦人連盟(成道会募金分)

一金二万円也 築地本願寺

一金二万円也 東京本願寺

一金一万円也 浅草高等美容学校

一金一万円也 麻布照海

一金一万円也 永平寺別院

一金五千円也 心法寺布村孝順

一金三千円也 真言宗雲雲寺

一金二千円也 吉水学園

一金五千円也 徳島県仏教会

一金壹千円也 真言密宗日石寺

以上

# 軍備なき世界の創造 (完)

(世界宗教者平和会議講演より)

湯川 秀樹 博士

(ノーベル賞受賞者)

平和共存というのは、そおいう場合でも一方が他方に戦争に訴えても自己の価値体系を押しつけることはしないという考え方であります。こおいう意味の平和共存の考え方は、一九三〇年以後、急速に力をもつようになり、多くの国々、多くの人々の間に定着しつつあるように思われます。

そこで、ここを第一番目に止まる駅とするならば、次の停車駅は各国の軍備の撤廃でありましょう。しかし、多くの人は国際政治と軍備競争の現状からみて、そこへ到達するのは、きわめて困難だと思っております。実際、主権をもつ国々が、それぞれ軍備を保有している以上、それをできるだけ有効なものにするための努力を続けるであります。ある国が国力の許す限り、軍備を強化するならばそれは他の国々をも同様な方向に進ませる刺激となるであります。かくして軍備競争はどこまでも続くのであります。

このような常識は、実は時代おくれになっており、もはや現代および未来に適用しないのであります。そのことを明白に示す例として、「核抑止戦略」なるものを挙げることができます。私自身をふくめる科学者の一群が核兵器を廃絶することが絶対に必要だと主張したのに対する反論として、今いった核抑止戦略が核

大国の科学者の一部によって考え出されたのであります。それによると、米ソの二大国の核軍備をなくさなくとも、それが均衡を保つ限り核戦争は抑制されるということになります。なぜかといえは、二大国のどちら側も核兵器による第一撃によって相手国を打ち倒してしまうことができないで、必ず相手側からの報復的な第二撃を受け、莫大な損害を受けるといふ状況になっている限り、どちら側も先に手出しはしないだろうから、核戦争は起こらない。この説は一見もつともらしく感じられますが、少しく考えてみれば根本的にまちがっていることがわかります。そもそも「力の均衡」という古くからの考え方は強国間の軍備競争を正当づける「言いわけ」でもありました。力の均衡の中で自国が安全であるためには、自国の武力が僅かでも相手国のそれより優位に立つ必要があります。ところが相手国もまた同じように考えるのであります。ようから、どこまで行っても切りのない軍備競争が続くことになりま

す。それは恐るべき浪費であり、強大国自身にとつても人類全体にとつても、大きな損失であるばかりでなく、元来「二大国のどちらも第二撃を恐れて第一撃をさしひかえる」という核抑止戦略の大前提そのものが成立しないものであることが、最近ますます明

確になりつつあります。「攻撃は最善の防禦である」という古い諺は、残念ながら核兵器の出現以後においても依然として成立するのであります。第二撃のための核ミサイル発射基地を地上に構築しても、潜水艦を移動基地として使っても、それらが第一撃に対して安全である確率が急速に減少しつつあることは専門家の認めるところでもあります。しかし、そういう技術的問題に立ち入るまでもなく大量の核兵器の存在自体が、人類全体に底知れぬ恐怖をあたえ続けるという、より明白な、より根本的な理由だけから、私たちは核兵器を一日も早く、この地上からなくしてしまふための努力を惜んではならないのであります。

ところですでに述べた理由により、核戦争だけでなく、戦争一般がなくなるためには、核兵器や生物兵器、化学兵器だけでなく、各国の軍備を全面的に撤廃する方向へ、人類は進んでゆかねばなりません。こういう主張は決して国際政治の現場からかけはなれた知識人だけによってなされてきたものではありません。すでに一九五九年の国連総会に、全加盟国が「全面完全軍縮に関する八二カ国決議」を提案し、全会一致で採択されたのであります。それは通常の兵器をふくめて各国の軍備を完全に撤廃するという大目標に向つて進む決意が、各国政府の代表によって表明されたことを意味しています。その後の十年間における軍縮問題の推移からみると、このような決議は、政治家、外交官の口頭禅にすぎなかつたと冷笑する人があるかもしれない。しかし国連代表の一人一人の思惑いかにかわらず、そこには人類の意志の反映があると、私は思うのであります。二年後の一九六一年には、米ソ兩國の共同宣言が国連総会への報告への報告という形で発表されました。それは、いま述べた総会決議に基づいて、多数国家間の軍縮交渉を進めてゆく上での諸原則について、両国の合意した結果を要約したものであり

ました。

国連の軍縮委員会は、実はもっと以前から存在していましたが、この決議や宣言に力づけられて、委員会の活動は盛んになったように見えました。そして一九六三年には部分的核実験停止条約に米ソ両国が調印いたしました。これに対するいろいろな方面での一致していたとは言えませんが、私たちはともかくも世界平和への第一歩として、これを歓迎したのであります。

しかるに、その後の国際情勢の変化は、私たちの期待に反しました。ベトナム戦争、中東戦争など、平和への方向へ逆行する動きが目立ってきました。水爆をふくむ核保有国も、中国とフランスが加わって五カ国を数えることになりました。米ソ両国の核兵器体系は、多様化と巨大化の一途を辿ってきました。居所不明の移動基地として、核ミサイルを具えた原子潜水艦が登場しました。さらに核ミサイル防禦ミサイル(A B M)、またそれに対する多弾頭ミサイル(M I R V)が出現しました。このような止め度のない核軍備競争は、上述の軍縮委員会や一九六九年以後、今日まで継続している戦略兵器制限交渉(S A L T)を無力化してきたように見えます。

しかし、いかに巨大な国々といえども、できることには限度があります。無限大へ向っての暴走は、おそれられ早かれ停止せざるを得ないのであります。すでに指摘いたしましたように、核抑止戦略の矛盾は、もはや弁解の余地がないほど明白になって参りました。盾に対する矛の優位が明白になりつつあるのであります。「恐怖の均衡」という表現さえ古くさいものとなり、核大国は常に相手の第一撃を恐れ続けなければならない状態に陥りつつあるのであります。

このような状況のもとでは、全面完全軍縮自体が、到底達成できない理想だと判断する人が多いかも知れない。中には核兵器の存在の中でおののくという意味

での核時代がいつまで続くのか、人類の宿命であるとも

まで思いこむ人もあるかも知れません。しかし「夜の闇の最も深くなる時、暁は近い」という諺を、私は信じたと思います。核時代が二十年以上も続いているのは、自然現象としてはありません。核兵器を中心とする巨大な軍備体系は、人間がみずから開発してきたものであります。従って、それをみずから開発してきたもの可能性は、人間の側に残されているのであります。核兵器は遠方の星のように、人間の手のとどかないところに自然物として存在しているのではなく、人間の知的活動の産物であります。ところが国際政治のあり方もまた、人間の知的活動の別の形での現われであります。しかも、この二つの活動は、絶えず相互に影響をおよぼしあっているはずであります。全面完全軍縮の達成が絶望的に見えるのは、それを国際政治がどうあるべきかという問題と切りはなして、前者だけを孤立した目標としているからではないでしょうか。別の言葉でいえば、全面完全軍縮自身を終着点と考えるのではなく、もっと大きなヴィジョンを持つ、その中の目標の一つと考えることによって、軍縮自身も実現可能となるのではないのでしょうか。

国家間の紛争が戦争にまで発展するのを防止するために、最小限度必要なのは、国際的な話し合いの場でありますが、これについては既に、各国政府の代表が討議し決議する機関としての国際連合が存在しています。そして、それが国際紛争の平和解決に、しばしば大きな貢献をしたことは確かであります。しかし国際連合が無力であることを痛感させる場合も度々ありました。特に核大国が紛争の関係国であった場合に、それが最も明白に現われました。さらにまた、すべての国が国際連合に加盟しているのではないこと、中でも中国に住む人々——全人類の四分の一に近い多数の人々が、自分たちの代表者を出すことができないということとは、

誰の目にも明らかな、国際連合の欠陥であります。

ところで国連憲章は第二次世界大戦の終結の少し前にできあがっていました。それ故、国際連合は核時代における国際紛争の解決のためには、時代おくれの機構たるべく運命づけられていたと極言することもできるであります。今日、私たちは何とかして核時代を超えて、次の新しい、よりよい時代を招きよせたいと切望しています。そういう期待を持つ私たちの、国際政治のあり方についてのヴィジョンは当然、国際連合を超えるものならざるを得ません。

原子爆弾の出現後まもなく、私は世界連邦というアイデアに強い関心を持つようになりました。こういう考え方は、実は決して新しいものではありません。人類社会が、それぞれ絶対主権をもつ多数の国家の集まりであるという状態が続く限り国家の間、あるいは国家群の間で戦争が行なわれる可能性は決してなくなりないという指摘は、くりかえしなされてきました。そして、それに引き続いて、国家主権を相対化し、それを制限し拘束する、より上位の権威としての世界法の制定と、それに基づく世界連邦の諸機構の樹立なくしては、戦争のない世界は実現されないという主張がなされる場合も、しばしば、ありました。世界連邦というのは、ある一人の人だけが提唱者と見なされるべき思想ではなく、むしろ、いろいろな時期に、いろいろな地域に、このような思想が独立に現われたとする方が、真実に近いように思われます。

いずれにしても、国際連合の根本的な欠点は、各国の絶対主権を認めた上での連合体であることです。世界平和を保持するためには、各国が自国の利益のために無制限に、その力を行使するのを、さしひかえさせなければなりません。現在、国際世論が、ある国、あるいは国家群の暴走を抑えるのに、ある程度まで役立つと思いますが、それがもっと強力なものになる

ためには国際的な制度と結びつかねばなりません。そのためには、先ず第一に世界法がつけられねばなりません。それは各国の主権の重要な一部分を、国家よりも上位にある機関に移譲することを意味しています。第二次世界戦争後まもなく、世界連邦建設のための国際的運動が盛んになり、私も世界連邦主義者世界協会(WAWF)の一員として、この運動に協力して参りましたが、この協会のモットーは「世界法による世界平和」となっています。

前に私は、全面完全軍縮という目標が高くかかげられながら、現実には、なかなかそれに近づけないと申しましたが、その原因の一つとして、各国の軍縮を公約どおり実施されているか否かを査察によって確かめるのが難かしいということがあります。自国だけでなく、他の国々も協定どおりに軍縮を履行しているという安心感が得られるようになっていなければ、どの国もなかなか軍縮にふみきらないであります。従って査察のための国際機構は、軍縮に関しては個々の国家よりも上位の権威をあたえられなければならないことになりましたが、それはすでに国際連合的段階を超えています。このように考えてゆきますと、各国が軍備を縮小してゆく過程と、世界連邦を現実化してゆく過程とは別なものではなく、両者は時間的に——少なくとも一部は——重なりあって進行させてゆかねばならないのではないかと思います。

以上が私のヴィジョンであります。それが現実となるためには、人類が近い将来に少なくとも一度、大きな飛躍をしなければならぬと思います。人類の長い歴史をふりかえってみますと、幾度かの画期的な飛躍があったことが認められますが、その中でも特にいちじるしいのは、紀元前六世紀ごろから始まる、人間精神の飛躍的な向上でありましょう。当時の文明の先進地域であった中国、インド、中東、ギリシヤなどが

ら、ほとんど時を同じくして、大思想、大宗教が現われだしました。この時期の終りをどこにとるべきかはつきりませんが、多分、紀元後六世紀か七世紀まで続いたと見るのが糧当でありましょう。この時期に現われた大思想家、大宗教家たちの教えには、それぞれ互いに違ったところがありました。しかし、それと同時に、一つの重要な点において、それらは一致しておりました。それは今日、私たちが人類愛と呼ぶところのものであります。

この時代に出現した世界宗教は、その後、長年にわたって無数の人々を精神的に救済するのに決定的な役割を果たしてきました。ところが十七世紀になって、西欧で近代科学が勃興して以後、人々は物質的な生活の向上に、より大きな関心をもち、より大きな努力を傾けるようになってまいりました。それはそれで大いに意義があることであります。今日もまだ、この地球上から貧困や飢餓をなくしてしまうことができないのですから、科学や技術の活用による生活の向上のための努力は今後も続けられなければならないのはいうまでもありません。しかし、科学や技術の進歩は、人類に福祉だけをもたらしたのではなかったのです。核兵器や化学・生物兵器などが、科学の好ましくない副産物であったばかりではありません。

今日、先進諸国の深刻な悩みとなりつつある公害もまた科学文明の副産物であります。よかれあしかれ科学や技術が今日の人間社会において、圧倒的な影響力を行使しているのとくらべますと、宗教の役割は相対的に小さくなっていることを否定できません。その役割は終わったのでありましようか。皆さんはもちろんそうは思っておられないに違いありません。私のような科学者から見ましても、現在および近い将来において宗教家に果していただきたい役目が少なくとも一つあると思

ます。先ほど私は、世界法とか世界連邦とかいうことを申しました。それは表面的には法律とか政治とかの次元の問題のように見えます。しかし、世界法が制定され、それが守られるためには、人間相互の間に国境や民族の違いを越えた友愛や信頼感の裏づけが必要であります。戦争のない一つの世界へ向つての飛躍は、政治家や科学者だけでは成しとげられないのであります。人類は新しい形でもう一度精神的に飛躍的な向上をとげなければなりません。その飛躍台は、二千年前と同じく、人類愛よりほかにないのであります。戦争の問題を別にしても、人類は公害とか自然の破壊とかによる重大な危機を迎えつつあります。国家間の抗争に勢力を消耗させるべき時代ではありません。政治家も科学者も宗教家もふくめて、あらゆる人々が人類の自己救済のために専心すべき時期なのであります。こういう時期に、この会議が開かれますことには大きな意義があることは確かであります。私はご出席の皆さまの世界平和に対する熱意に心から敬意を表しますとともに、皆さまの今後のご努力に大きな期待をかけるものであります。

新発売!

御縁香(記念品) 大廉売卸・小売 特約店ご希望の方にも応じます。

- 母珍らしい文字が現れる縁香(意匠登録申請中)
- 法名入(香)縁香(縁香の法名を自由に記述して下さい)
- 御文字入(香)縁香(お名前が記述された縁香が現れます)
- おみくじ(香)縁香(ご自分の名前にキッと当たります)
- 母縁香(梅金香)(二重の縁香を二重に記述して下さい)
- 母仏氏法名(香)縁香(母の法名を自由に記述して下さい)
- 印度直輸入(香)縁香(曲けても折れない、ご自由にハサミで切れます)
- 御一振下されば詳細(縁香、説明書等)をすぐ御返信申し上げます。

梅金商店

# セイロン大会 大会テーマが決定

既報の如く今年五月九日から四日間セイロン国コロンボ市において第十回WFBセイロン大会が開催されることに決定した。全日本仏教会では別項の要領で約四十名の団体を編成し東南アジア並びに西南アジアの仏教徒と友好親善を深めるため日本仏教代表団を派遣することになった。

大会に関する大綱は次の通り。  
(会議テーマ)

世界平和推進における仏教徒の役割  
一、各国WFBセンターからそれぞれ正式代表とオブザーバーを派遣する。

## ルンビニ開発に 仏教徒が協力

今年の春ニューヨークにある国連本部から釋尊の聖地ルンビニの地域をネパール政府と共同で開発をしようという計画書とその青写真が発表され、世界の仏教徒の強力な資金援助をしてほしいと各方面に要請があった。

全仏に対してはバンコックにある世界仏教徒連盟本部よりこの運動に対して協力かたの正式依頼がこのほど通知されてきた。

その主なる予算は次の通り。(聖なる園)一〇〇万<sup>ドル</sup>(諸施設費)七〇万<sup>ドル</sup>(緑地帯)一五十万<sup>ドル</sup>(巡拝者の村)一六万五千<sup>ドル</sup>(技術的予算)六五万五千<sup>ドル</sup>

(巡拝道路)六四万<sup>ドル</sup>合計五六六万<sup>ドル</sup>  
このことに関し国連事務総長ウ・タント氏より左記の特別メッセージが発表された。

メッセージ

「大聖釋迦牟尼世尊の誕生の地ルンビニは世界の仏教徒にとって聖地であり、他の世界宗教の聖地と同じような意味をもっている。私は一九六七年の春ルンビニを訪れた時、ルンビニが孤立しており、また一般の巡拝者や旅行者にとってかなり近づき難いということに心を打たれた。それにもかかわらず心の静けさや寛容さや、同胞への愛を説いた仏陀の偉大な精神的・道徳的価値への尊敬から毎年何千という巡拝者がルンビニを訪れている。

## 仏教界の動き

(ニュース・投稿を歓迎します)

ゴータマシッダルタ太子は三十五歳で悟りを開き仏陀となった。仏陀は深い智慧や果てしなき哀れみを私たちに与え人間性の開花に貢献された。歴史のどの時代をみても仏陀の教えが今日ほど重要な意味を持つときはないと思えます。」

一九六八年の初頭以来ネパール政府と国連との共同開発事業の準備が行われてきた。その結果、十分な施設を備えた聖地とし、また巡拝者のセンターにするため全世界の仏教徒の協力を求めている。

## 謹賀新年

### 浄土宗総本山知恩院

門 主	岸 信宏
執 事	長 鶴 隆 隆 玄
法 務	部 長 松 室 隆 哲
布 教	部 長 谷 地 益 雄
護 持	信 徒 部 長 立 松 法 禪
庶 務	部 長 二 本 松 聖 順
財 務	部 長 本 田 正 義
守 廟	長 赤 木 定 順
施 設	事 業 部 長 三 宅 勇 誠
開 宗	八 百 年 慶 讚 會 準 備 局
事 務	部 長 藤 田 説 量
庶 務	部 長 赤 平 昌 導
經 理	部 長 関 真 翁

# 浄土宗全書

—日本仏教の成果 浄土教のあけぼの—

- 予約申込規定 全四十二巻予約申込者のみに限り出版します。
- 定 価 各 巻 2,000円/特価 全四十二巻一時払80,000円/申込期限/昭和45年7月末日 ※内容見本進呈※
- 刊 行 期 日 昭和45年4月第一巻好評発売中・第二巻5月配本・第三巻6月配本・毎月一冊刊行
- 御申込みは大正大学浄土学研究室・仏教大学浄土学研究室・右記発売元又はお近くの書店か浄土宗支所にお申込み下さい。

★おわび—解説・執筆者塚本善隆先生ご病気の為2回配本が遅延いたしましたことを、ご購入者各位に深くおわび申し上げます。

発行所 浄土宗開宗八百年  
記念慶讚準備局

総発売元 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4東大赤門  
前 TEL03-811-5361 振替 東京1900

# あけましておめでとうございます

## 臨濟宗南禅寺派

管 長 柴山全慶  
 宗務総長 後藤憲巖  
 教学部長 成山憲道  
 法務部長 直山元貞  
 財務部長 中奥宗寿  
 庶務部長 三木窓外

## 真宗大谷派宗務所

管 長 大谷光暢  
 宗務総長 三森言融  
 参 務 多屋弘  
 参 務 小林文雄  
 参 務 深田英雄  
 参 務 山崎義敬  
 総務部長 春田義正

## 真宗大谷派東京宗務出張所

所長 伊藤哲雄

## 真宗大谷派東京教務所

所長 美濃部薫一

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五

東京本願寺内

## 浅草門跡

## 東京本願寺

住職 大谷光紹  
 輪番 伊藤哲雄  
 副輪番 大平文友  
 外 職員一同  
 東京都台東区西浅草一ノ五ノ五

## 浄土宗宗務庁

門 主 岸 信宏  
 宗務総長 小林大巖  
 教学局長 河合孝勝  
 総務局長 湊 麟祐  
 宗務支所長 新谷寛応  
 教化部長 山口諦存  
 学事部長 加古善広  
 財務部長 松平智禅  
 庶務部長 真柄大真  
 開八庶務部長 小林忍戒  
 兼企画部長取扱

# 恭賀新春

真言宗智山派  
総本山智積院

京都市東山区東山七条  
電話〇七五(五四一)五三六一

管主長 那須政隆

宗務総長 寺務長 田中隆恵

教化部長 近藤隆敬

法務部長 西田隆演

教学部長 松平実禅

総務部長 別所弘因

宗務出張所長 小宮勝憲

真言宗御室派宗務所  
総本山仁和寺

管門跡長 森 諦円

宗務総長 執行長 立部瑞祐

京都市右京区御室

東京都台東区谷中五ノ八ノ二八  
観音寺中

新義真言宗

宗務総長 岩堀至道

滋賀県野洲郡中主町木部

真宗木辺派宗務所

役職員一同

東京都豊島区北大塚一ノ二六ノ四

法華宗(本門流)宗務院

管長 三浦日説

宗務総長 福島泰信

大本山

成田山新勝寺

千葉県成田市成田一  
(〇四七六)三三二二一(代)

岐阜県仏教会

会長 大石好文

同 高木弘

理事長 加納博司

東京都港区高輪三ノ二五ノ一八

高野山東京別院

山本芳遵

板橋宥成

東京都江東区北砂四丁目  
持宝院

石川県仏教会長  
大谷派金沢教務所長  
大谷派金沢別院輪番

吉田智信

# 春 新 賀 恭

## 真言宗豊山派宗務所

東京都文京区大塚五ノ四〇ノ八  
☎112 (九四一)〇六三九

管 長 平林 宥高

宗務総長 築山 定誉

総務部長 浅井 堅教

教化部長 野口 宥興

教務部長 永見 聖宏

財務部長 久保埜 太清

## 青森県仏教会長

東 義 寿

青森市堤町一ノ一  
蓮得寺

## 社団法人 全日本仏教婦人連盟

会 長 大谷 智子

副会長 一条 智光

理事長 山本 杉

事務局長 船口 暉子

東京都世田谷区上水四ノ九ノ七  
☎156 (三三〇)一五九八(代)

## 岡山県仏教会

会 長 高峰 秀海

事務所  
岡山市平井七〇九 妙広寺内

## 財団法人 埼玉県仏教会

浦和市高砂四丁目三ノ一八  
〇四八八(六一)二二三八

会 長 倉持 秀峰

副会長 佐久間 鎮雄

事務局長 石塚 大喜

事務局長 北之内 真竜

## 静岡県仏教会

会長 福王寺 田中 亮三

副会長宝台院 野上 達雄

同 宿曹寺 小原 良碩

同伊豆国分寺 高木 是精

事務所  
磐田市城之崎 福王寺内  
磐田(二〇)五二二八

## 京都府仏教会

会 長 平野 竜法

理事長 奥 博良

# 謹 賀 新 年 昭 和 四 十 六 年

韓国の旧都扶余に仏教伝来の恩を感謝して謝恩碑を建立する運動にご協力を！

東京都江戸川区一之江四の十三

申 孝 園 内

## 仏教伝来謝恩事業会

会 長 佐藤 泰舜

副会長 平林 宥高

同 鈴木 一

委員 長行 田中 香浦

全仏評議員  
東京本願寺総代

## 慶野 聡一郎

東京都世田谷区池尻二ノ

三四ノ一八池尻コーポ

紅林体育教室

## 財団法人

## 国際仏教興隆協会

会 長 賀屋 興宜

理事長 巖谷 勝雄

各 員 一 同

東京都目黒区中目黒五ノ二四ノ五三  
電話 153 祐天寺内  
電話七一一七六〇八

## 前進座

中村 翫右衛門

他 一 同

東京都武蔵野市吉祥寺南町

〇四二二(四三) 一一五六(代)

## 株式会社 千代田トラベル

取締役社長 織内 七郎

## 日蓮宗陽運院

住 職 新川 日見

東京都墨田区太平一ノ二五ノ三  
(六二二) 一六五二

組織専門委員

## 新美 孝道

曹洞宗信松院住職  
全仏組織専門委員

## 西村 輝成

八王子市台町一七一  
(〇四二六) 二一六九七八

社寺 銅板屋根葺專業

株式会社 小野工業所

取締役社長 小野 留吉

本社 東京都墨田区石原四ノ十二ノ一

## ピーエス観光株式会社

東京営業所

東京都中央区日本橋江戸橋二ノ九  
(二七二) 一二四六(代)

## (株) 菊水會館

代表取締役 木村 景映

東京 (八四三) 四九八一(代)

# 謹賀新年 昭和四十六年

天台宗務庁

天台座主

菅原栄海

宗務総長 千葉 照源

教学部長 武 覚円

社会部長 小川 晃顕

財務部長 谷村 常晁

庶務部長 宮田 湛啓

総務室長 小堀 光詮

黄 檗 宗

大本山万福寺

管 長 加藤 慈光

宗務総長 森本 三鑑

孝道教団統理

天台宗大僧正

仏教哲学博士(セイロン)

名誉哲学博士(中華民国)

岡 野 正 道

横浜市神奈川区孝道山

曹洞宗審事院

院 長 黒田 白純

栃木県大田原市 光真寺  
品川区小山二丁目 桐谷寺

東京都新宿区大京町三一

慈母会館

財団法人

全日本仏教尼僧法団

理事長 北川 教全

創立30周年



創業94年

30年のあゆみを  
これからの  
ひろがる世界と  
日々に生かします

あなたの おそばに

## 東海銀行

全国200余店 海外2店・2駐在員事務所

# 韓国仏教代表が 全仏を訪問

去る十月十日から一週間韓国において世界仏教指導者大会を開催した。全仏からは国際専門委員長麻布照海等四名が隣国への親善を兼ねて派遣された。

その返礼として十一月十六日韓国仏教を代表して李能嘉（世界仏教連合事務総長）、釋漢岩（大韓仏教曹溪宗企画委員長）、釋吞虚（五台山日精寺管長）の三禪師が来日された。

全仏では十一月二十一日午後五時浅草木ノ実において三師の歓迎会を催した。



(歓談する代表者達)

## 哀悼

金剛秀一師（曹洞宗大本山総持寺副貫首、大雄山最乗寺山主）かねてより胃疾患のため東京歯科医科大学に入院加療中であつたが去る十二月六日遷化された。

## 新潟県仏教会

- 會長 長士田 真也
- 副會長 井上 憲司
- 同 岡 観容
- 事務局長 今湊 良敬
- 事務局員 中村 啓識

## 新年度の「仏教手帳」

一九七一年の「全仏」発行による、仏教徒手帳の頒布をはじめた、内容体裁は例年発行のものとはほぼ同じで二三四頁である。

残部がありますからなるべく早くお申込み下さい

頒布価格 一冊二五〇円  
送料 一部 三五円

五〜二〇部まで

都内七〇円

第一地区 一二〇円

第二地区 一六〇円

三〇〜四〇部まで

都内九〇円

第一地区 一五〇円

第二地区 二〇〇円

全日本仏教会事務局

（東京都台東区西浅草一―五―五）

（東京本願寺内）

## 第十回世界仏教徒會議セイロン大会

### 日本代表団募集

このたび第十回世界仏教徒會議がセイロンの首都コロンボ市において昭和四十六年五月九日から四日間開催されることになりました。

全日本仏教会においては第一回の會議以来毎回多数の代表団を送つてまいりました。

今回のセイロン會議にも代表団を送り、あわせて東南アジア

ならびに西南アジア諸国を訪れて各国の寺院参拝や仏教徒と友好親善を深める機会を得たく別項の日程によつて代表団を派遣することにいたしました。

なにとぞご参加下さるようお願いいたします。

なお、定員に限りがありますので満員になり次第締切らせて頂きますからご了承下さい。

一、経路

東京→サイゴン→クアランブール→コロンボ→キャンディ

申込先 東京都台東区西浅草一ノ五ノ五

（東京本願寺内）

二、期間

昭和四十六年五月六日〜五月二十一日（十五泊十六日間）

三、参加費用

三六五、〇〇〇円（ただし、旅券代、注射代、査証代は含まれていません）

四、申込方法

申込用紙にご記入の上、申込金五万円を減えて全日本仏教会国際局宛にお申込み下さい

残金は昭和四十六年四月六日まで左記取扱銀行にお振込み願います。

五、募集人員

四十名

六、申込締切

昭和四十六年二月一日（満員になり次第締切らせて頂きます）

## 全日本仏教会

電話（八四三）六三四三

昭和四十六年一月一日発行  
一月号 第一六三号

発行人 伊藤 哲雄  
編集人 白幡 憲佑

発行所 財団法人 全日本仏教会  
東京都台東区西浅草一ノ五ノ五（東京本願寺内）